

東アジアの平和と未来を考える

民権協大阪事務局長 郭辰雄

韓日間の交流がさまざまなレベルで活発になる中で、韓日の過去の歴史を視野に入れつつ、未来を志向する相互関係をつくっていくためのプログラムとして、民権協が主催、(財)とよなか国際交流協会が後援となり、8月11日から16日にかけて、「99 韓国スタディツアー～東アジアの平和と未来を考える」(以下ツアー)を実施した。ツアーは昨年に引き続き2回目となる。

今回はツアーのテーマを「東アジアの平和と未来」と設定した。それはいま日本社会では、「日米新ガイドライン」「盗聴法」など急激に右傾化が強まると同時に、朝鮮半島に対しては「テポドン」発射など危機感をあおる風潮が強まっている。こうした中で、日本も韓国も東アジアの一員であり、平和を実現していくために市民のレベルでどのようなことを考えていく必要があるのかを、韓国でさまざまな人たちと出会い、語り合い、そして実感しようと考えたからである。

そして、具体的なプログラムとしては、8月15日の統一記念行事への参加、北朝鮮への人道支援を行っている団体への訪問、過去の植民地支配の状況と歴史認識を学ぶためのナヌムの家と日本軍「慰安婦」記念館の訪問、韓国の学生たちとの交流とホームステイであった。

ツアーの始まりはまずブルコギから

今回のツアーは民権協のスタッフ2名を含め、16名の参加者となった。昨年とは違い、今年は東京、大阪で参加者を募集したので、東京、栃木、大阪、京都、兵庫、高知と幅広い地域から、また10代から50代までと世代も多様な人々が参加した。

8月11日、関西空港、成田空港からそれぞれ出発し、ソウルで合流することになった。金浦空港に到着してからは地下鉄に乗って宿舎へと移動。今回宿泊予定のプリンスホテルは、地下鉄明洞駅の目の前にありロケーションとしては文句なしのところ。ホテルでのチェックインをすませて6時半からオリエンテーションをかねた全体での夕食会が始まった。

会場は、ハンシン大学日本学科の学生たちが手配してくれた明洞にある北朝鮮からの亡命者が経営しているお店で、学生いわく「美味しくてそんなに高くない店です」とのこと。店内は明るく、奥の座敷に上がってまずは乾杯。

今回は参加者が全国にまたがっているために、大阪・東京で事前のオリエンテーシ

ョンをおこなったものの、参加者が一堂に会する場は初めてだった。この場には河棕文ハンシン大学助教授も駆けつけてくれ、学生も含めて約 25 名が食事をともにした。

参加者もそれぞれのテーブルにわかれてプルコギ(焼き肉)に舌鼓を打ち、ビールの勢いもあってか、初対面とは思えないほど打ち解けた雰囲気での交流会となった。

河棕文さんにはホームステイや通訳の手配などで大変お世話になったが、河棕文さんによれば「今年のスタディツアーは学生たちも昨年とはまったく違って、自分たちからホームステイの手配をしたり、プログラムをたてたり、とても積極的にやる気を出してくれたので本当に楽をさせてもらった」とのこと。

「昨年のスタディツアーの受け入れが、学生たちにも日本人との交流の価値を実感させたのだろう」と、これからもぜひ継続した交流のプログラムをつくっていききたいと語っていた。

食事を終えてからはだれ一人ホテルに戻ることなく、そのままノレバン(カラオケボックス)に直行。いまは韓国のノレバンにも日本語の歌がたくさんあり、韓国の日本文化開放が進んでいることが感じられた。演歌あり、流行歌ありの日韓対抗歌合戦(?)が始まり、ソウルでの第一日目の夜は更けていった。

北朝鮮への人道支援を考える

翌 12 日から本格的なツアーのプログラムが始まり、この日は北朝鮮への人道支援を行っている団体を訪問して、現在の状況と支援運動についてのレクチャーを受けた。

昨年に引き続き、このテーマをいれたのは、北朝鮮の食糧事情が国際的な支援活動があるとはいえ、依然と深刻であり、いまの韓国、朝鮮半島を見る上で決して避けて通れない問題である点、日本と朝鮮半島との歴史的なかわりから見て、そしてこれからの日本と朝鮮半島との関係やアジアの平和の実現を考えるとときに極めて重要な問題であるという点からである。

午前 10 時に「同胞助け合い運動」を訪れ、宋ギョンミン広報・調査部長からこれまでの活動についてレクチャーを受けた。

宋さんは、「同胞助け合い運動は、北朝鮮の人たちに対する支援活動はもちろんだが、中国朝鮮族やロシアの高麗人など海外の同胞たちも視野に入れながら、私たちの民族が互いに助け合いながら生きていくことができるようにさまざまにとりくみを進めてきた」とし、いまは中心として北朝鮮の人道支援に取り組んでいると説明した。また「北朝鮮ではこれまでに食糧不足のために 300 万人を越える人たちが死亡しており、中朝国境地帯への難民も増えている。そして深刻なのは子どもである。今年の 2 月に私たちの団体が平壤を訪問したときに産婦人科を視察したが、その時、韓国の新生児の平均体重が約 3 ~ 3.5 キロであるのに比べ、平壤では 2 ~ 2.5 キロである。これは食糧不足が新しく生まれてくる生命にまで深刻な影響を与えていることを物語っている」と述べた。

そして、「しかし韓国では97年からのIMF危機のために経済状況が悪化し、それまで集まっていた支援が減少した。だから今は北に対しては物品支援を中心に行っており、医薬品、本、コンピュータ、山羊などいろいろな支援物資を送っている」と説明した。

それに対して参加者からは、「北朝鮮に食糧を送って本当にちゃんと手渡っているのか」「本を送って北朝鮮側は問題なく受け取っているのか」などの質問が出された。

レクチャーを終えて昼食をとっている時、宋さんから「在外同胞の出入国と法的地位に関する法律」が8月12日に国会を通過しそうなので、市民運動団体などがそれに抗議して明洞聖堂でろう城を準備していることが伝えられた。

いま、海外には日本、米国、中国、ロシアなど世界各国に550万人のコリアンが居住しており、今回の法律は在外同胞の韓国での法的地位を安定させると同時に、不動産売買や金融などで規制緩和を図り、長期滞在者には年金受給資格まで認めるなど、韓国国内でのより自由な経済活動を認めるという内容となっている。しかし、この法律では在外同胞の規定を「大韓民国の国籍を保有していた者またはその直系卑属として外国国籍を取得した者のうち大統領令が定める者」としているために、中国の朝鮮族、ロシアの高麗人が適用対象から除外されることになる。

今回の市民団体の抗議は、中国、ロシアの同胞もこの法律の適用対象に加えるべきであるとしておこなわれたものである。

この話を聞いた私たちは、予定を変更して明洞聖堂のろう城現場に向かうこととなった。

明洞聖堂では、ろう城はまだ始まっていなかったが、徐京錫・同胞助け合い運動執行委員長、金ヘソン・城南外国人労働者の家所長、李光奎・ソウル大学教授らが迎えてくれた。徐京錫氏は、参加者に「北朝鮮の人道支援や海外に住む私たちの同胞への支援の取り組みは、決して私たちの民族の問題だけではなく、東アジアの平和の実現という意味でも重要であり、皆さんともこれから一緒に考えていきたい」と語りかけた。

時間の関係上、残念ながらろう城が始まる前に会場をでなければならず、その後(社)グッドフレンズを訪問した。(社)グッドフレンズはもともと、同胞助け合い仏教運動本部として北朝鮮の人道支援事業に精力的に取り組んできたが、今年に入って、独立した社団法人として平和実現、人権擁護、難民支援などの課題に取り組むために立ち上げられた団体である。

深刻な中国への「食糧難民」の実態

事務所のある浄土会館を訪問するとスタッフの張玉希さんが出迎えてくれ、中を紹介してくれた。浄土会は仏教団体で、北朝鮮の支援だけではなく、環境問題や文化活動など幅広い社会活動を行っており、それぞれのセクションに分かれた運営が行わ

れていた。

一通りの説明の後に講堂で北朝鮮の食糧事情と支援活動についてレクチャーを受け、特に食糧難から中国へと避難した、いわゆる「食糧難民」のインタビューをまとめたビデオを見せてもらった。

グッドフレンズでは昨年11月から今年の4月にかけて中国の東北三省に調査員を派遣し2479の村で把握した「食糧難民」数を28472名としており、東北三省全体では30万人以上に達するとしている。

またその中では女性の比率が75.5%と高く、人身売買による漢族との強制的な結婚がおこなわれるケースも深刻化している。そして非合法の滞在のために仕事があったとしても、低賃金、長時間労働と環境は劣悪であり、甚だしくは住まいと食事だけを提供されて働いているという。

張さんは「北朝鮮にいる人たちはまだまだ不十分であるとはいえ、国際的な関心と支援を受けられる状態にあるが、中国に脱出した人たちは中国・北朝鮮政府からも保護を受けられず、国際社会からも注目されていないために、悲惨な状況の下におかれている。ぜひ北朝鮮の人たちへの支援と同時に中国にいる人たちへの支援にも関心を持って欲しい」と語った。

夕食は浄土会館地下の食堂でご馳走になる。さすがに仏教団体の食事とあって、キムチや野菜を中心にした料理。こちらからは「普段皆さんが食べている食事で」とお願いをしていたが、その日の午後に法事があったために普段よりも品数が多いとのこと。会館の人たちもモチや果物を「たくさん食べなさい」と出してくれ、楽しいひとときを過ごすことができた。

7時頃に浄土会館を出て、ホテルに戻りそこからは自由行動となったが、さすがに「スタディ」(?)は昼間にとどまらない。ほとんどの人たちが明洞のホップ(ビールを中心にした飲み屋)に入って交流。

ナヌムの家と「日の丸」

翌日は、ナヌムの家に行くためのバスが9時にホテル前に到着。全員定刻どおりに集合して、バスに乗りこみナヌムの家にむかう。この日は夕方からはハンシン大学の学生たちのお宅にホームステイをすることになっているので、行きの車内でホームステイのパートナーを紹介し、隣り合って座ってもらう。

最初は多少緊張感があったものの、片言の日本語とハングル、はたまた英語まで飛び出して、和気藹々とした雰囲気。翌日が自由行動日ということもあって学生たちからも「どんなところに行きたいですか」「どんなことをしたいの」と、質問が相次ぎ、参加者に精一杯楽しんでもらいたいという気持ちがよく伝わってきた。

ナヌムの家に到着してまずは講堂でのビデオの上映。日本軍「慰安婦」記念館を見学するときには、日本からボランティアで滞在している女性が日本語での案内をしてく

れる。昨年を見るだけだったが今年は日本語の資料や案内もあり、かなりきっちりと運営されているという印象を受ける。

やはりナヌムの家に行くと、日本と韓国の間にもまだに横たわる戦後補償、歴史認識の問題を改めて考えさせられる。おりしも日本では「日の丸」「君が代」法案が国会を通過した直後だったので、ハルモニがはためく「日の丸」のもとで嘆き悲しむ少女の姿を描いた絵を見たとき、何とも言えないやりきれなさを感じた。

残念ながらハルモニたちはソウルに出ているために会うことはできなかったが、ツアーの参加者にとってもナヌムの家の訪問は、日本人々と韓国人々が本当の意味での友人関係をつくっていかうとするときに、決して忘れてはならないものを胸に刻んだのではないだろうか。

ナヌムの家をあとにして、戻る途中で、暑いのと適当な場所がなかったために休憩所に停車してバスの車中で昼食をとることに。弁当を食べ終わってから、学生と参加者がそれぞれ自己紹介。

参加者がホームステイへと向かう。参加者たちの話によると、お世話になったお宅はみな歓迎してくれた模様で、近くのポジャンマチャ(屋台)で焼酎を飲みながら語り合った人、学生の友人たちとノレバンに向かった人、親戚の一歳の誕生日のパーティーに招かれた人、市場めぐりをした人などそれぞれで過ごしたようだが、参加者からは一様にツアーでもっとも印象に残った夜になったとの感想が聞かれた。

さて、私たち引率者は、いざという時のために宿舎に待機することになっていたが、とりあえずは河棕文さんと慰労をかねて夕食を共にした。

その場で、河棕文さんから、「他の大学にも呼びかけて、もっと大きくすれば」とか、「学生たちと合宿みたいな形で、報告や討論も入れたプログラムはどうか」「ホームページをつくって恒常的に交流できる形にすれば」「今年初めて卒業生が出て、これから日韓に関係のある仕事に就く人がどんどん出てくる。このツアーも5年後には同窓会をやればどうか」などさまざまなアイデアや意見を伺い、これからの韓日の市民同士の交流を進めていく上での貴重な論議を深めることができた。

翌日は、完全に自由行動日であったので、私たちは参加者のうちでアジア・太平洋人権情報センター職員と(財)とよなか国際交流協会職員、高知の平和記念館「草の家」のスタッフとともに韓国の市民運動団体である参与連帯を訪問した。参与連帯は、1994年に発足した韓国で最も影響力のある市民運動団体の一つであり、特に市民の政治参加、議会監視活動、国際人権活動など非常に幅広い活動を行っている。

そこで意見交換をした後、独立公園と西大門拘置所後を訪れた。西大門拘置所は、日本の植民地時代に建てられ、独立運動家を数多く拘束、拷問してきた弾圧の象徴の一つであり、いまは記念館として保存されている。記念館の中にはいると、当時の遺品や歴史資料の展示があり、当時の取り調べ風景などが人形で再現されていた。

しかし、一方でこの建物は解放以後にも拘置所としてそのまま利用され、民主化を

求める人々を弾圧する施設として利用されてきた歴史も持っており、日程植民地代だけを強調する展示内容には少し違和感を感じたのも事実である。やはりこの建物は日本、韓国双方の国家権力によって不当に弾圧を受けた人々の歴史を語り継ぐものになるべきだろう。

「希望の行進」に参加して

プログラムの最終日は、「希望の行進」への参加であった。

これは、同胞助け合い運動、経済正義実践市民連合、韓文化運動連合などが主催し、民族和解協力汎国民協議会、第二建国汎国民推進委員会、行政自治部、KBS が後援したプログラムで、「民族の平和と和解を念願するすべての人たちが、国土を徒歩で縦断し、平和と和解を呼びかける」という趣旨のもと、7月23日から8月15日までかけて、南は釜山、木浦から北は臨津閣までを行進するというもので、私たちは8月15日の最終日に合流する予定となっていた。

行進団には、韓国全国からの参加者はもちろん、ヨーロッパ、ロシア、米国など世界各国からコリアンが参加しており、私たちツアーの参加者も、朝六時半に出発して合流し、行進を開始した。

ところが行進のスピードが思っていたよりもかなり早く、それに「三列になって！」「前を詰めて！」と横を歩く進行者の声がはっきりなしに飛び交い、「行進」というよりは「行軍」の雰囲気。

そうした中でも、まわりの人たちから「日本から来られたんですか」「どうして参加しようと思ったんですか」と暖かい声をかけてもらいながら、臨津閣へと向かった。

しかし、当初の予定は7～8キロ程度の距離を歩くことで、韓国側の受け入れ団体と調整していたのだが、行進の途中で聞いてみると、「20キロほどある」とのこと。結局、そのまま昼食をとる場所まで行進し、バスで臨津閣までの移動となった。ある意味でツアーのメインプログラムのひとつだったが、かなり過酷なプログラムとなってしまう、参加者の皆さんにもかなり負担をかけてしまった。

行進を終えて、臨津閣で民族和解協力汎国民協議会の主催により行われた「8・15」の統一記念行事は、今年は昨年よりも規模が大きく、舞台の上では統一を呼びかける声が響いていた。

この日は最終日ということもあり、7時から全員で夕食会。朝からの行進の疲れを残しつつも、和やかな雰囲気に参加者の人たちから、感想を聞く。(この場の話は要約して別掲載)食事を終えてからは、場所を変え、夜が更けるのを忘れての語り合いとなった。

国境を越えた出会い

私は韓国へのスタディツアーで最も大事なことは、「出会い」であると思っている。

日本と韓国の間にはまだ、歴史認識や戦後補償、反日感情などさまざまな解決されていない問題が横たわっており、その意味ではまだ「近くて遠い」関係にあることは否めない。

しかし、その一方で日本ではこうした問題に目を向けないまま、韓国の表面的な情報は氾濫しており、観光旅行に訪れる人たちは年々増え、あたかも「近くて近い国」になったかのような感覚を持つ人たちが増えていることも事実である。

こうした中で、このツアーは、日本と韓国の距離を正しく見据えながら、その上で、ともに未来を考えていくことのできる韓日の国境を越えた「出会い」をつくる、つまり「市民として韓日の相互理解を深めていく」ための一つのきっかけをつくっていきたいという問題意識から進めてきた。

そして、今回のツアー参加者との出会い、そして韓国でのさまざまな人たちとの出会いは、もっとお互いに対する理解を深めることが必要で、そしてそれが可能であるということを実感させてくれた。

これからも、過去を見据えながら未来を語り合う、そんな出会いをつくっていきたいと思う。